
メモダス

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモダス

【Nコード】

N0270BA

【作者名】

y u n a g i

【あらすじ】

暴君こと水無月アスカのせいで春休み最後の休日を返上する事になった如月瑞希とアスカの弟、水無月アキトの二人はいつも通りこき使われていた。その日の帰り道、瑞希は不思議な雰囲気を漂わすシスターと出遭い、他愛のない会話をした次の日にシスターさんを見た目がそっくりな転入生が登校初日に突然「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」と、爆弾発言をしてクラスを凍りつかせたのだが……。

序 章く死にたがりの少女く 前 篇 其の一

不思議な不思議な夢を見た。

周りには何もない見渡す限り真っ白な景色が広がる空間にポツリと佇む一人の少女……。

虚ろな表情を浮かべながら上を見上げて細くてしなやかな透き通る肌質の両腕を差し出して何かを求めているような。まるで、この何もない真っ白な空間から誰かが手を差し伸べ助け出してくれる事を待ち続けているようだった。

けれど、それは叶わぬ願いだと少女は薄々感じていた。時の流れさえ不確かなこの空間で一体どれだけの歳月が経過したのだろうか。いつからこのような事を続けているのだろうか。そして、いつまで続けられいいのか……。うか……。うか……。

それでも少女は眉一つ動かさず、虚ろな表情のまま差し出した腕を下ろさずに続けた。それが叶わぬ願いだろうとなんだろうと少女は少しでも可能性があると、祈りを捧げるように生気の無い瞳をゆっくり閉じて――

「はい。却下」

呆れ果てた表情を浮かべてテーブルに叩きつけるように冊子を投げ飛ばし無情にも没宣告を告げるカチューシャを付けたセミロングの凛々しいお顔立ち、すらりと伸びた手足に非の打ち所が無い出るところ出たコケティッシュな体軀みなつきの少女。水無月アスカは窓に寄りかかるように身を預けた。

「決断早えくよ、姉貴!」

アスカの無情な宣告に納得いかずテーブルを勢いよく叩き、立ち

上がりながら怒号を上げた少年。少女と瓜二つの顔付き、筋骨隆々とまではいかないが長身のがっちり体型である弟の水無月アキトは怒号を上げた後に静かに着席した。

「アキの言い分は分かるわ。だけど、根本的につまらない」

眉一つ動かさず淡々とした口調で吐き捨てるようにアキトの書きあげた最初で最後の今世紀最大の作品を酷評したアスカは額を押えて大きく嘆息する。

まだ、序盤中の序盤。出だししか目を通していないってのに、判断を下すのは少し早計過ぎやしないか、と心の内に留めながらも顔に出てしまっていたのか。アスカが眉間にしわを寄せてこちらを睨みつけているのに気付き、僕は目を逸らし少し咳き込みながら誤魔化した。

「まあいいわ。私がアンタ達に期待したのがそもそもの間違いだったわ。やっぱりこの退屈過ぎる生活を打破する為には私自身どうにかするしかないわね」

腕を組み仁王立ちをして凜々しい態度で僕達の事を嘲笑うかのように切り捨て、顎に手を添えて何か企んでいるのか思案顔になった。つたく、だったら最初から自分で何とかしろっての……。

僕が心の中でアスカに対して悪態をついていると弟であるアキトが姉に聞こえないように小声で、

「なあ〜キサラ。そんなにつまらなかったか、コレ……」

姉にボロクソに言われ、少しムスツとした表情を浮かべながら彼が書きあげた作品が綴じられた冊子をこちらに提示して僕に意見を仰いできた。

ふむ、と僕は冊子に手を伸ばして流し読みではあったがアキトが書き綴った「仮題 閉じられた少女」に目を通した。

主人公の少年が毎夜毎夜見る不思議な夢に登場する虚ろな表情を浮かべる少女は一体何者なのか？ なぜ、少女は真っ白な空間に閉じ込められているのか？ なぜ、少年はこのような不思議な夢を見るのかという話のようだ。

「いや、お前は頑張った方さ。初執筆の僕達にたった十分で短編を書けと命令し、出来上がるや否や少し目を通しただけでつまらんとってテーブルに叩きつけるアレがどうかしていると思えん」アキトに劳いの言葉をかけた僕は伸びをしつつ背もたれに寄りかかり天を仰ぐ。その際に少し椅子が傾きバランスを崩しかけたのは当然の事ながら秘密だ。

「姉貴の悪口を言うなあああ!!」

突然、アキトは体を震わせながらアスカの悪口(?)を言った僕に対して唾を撒き散らし頬を上気させて怒号を上げる。

「黙れ、シスコン!」

「いや、黙らんぞ! あんなんでも俺の大切な姉貴だ! 誰であろうと姉貴の悪口を叩く奴は俺が許さねえ。姉貴の悪口を言っているのはこの俺だけだ!」

弟である俺だけの特権だと誇張したいのか、アキトは両親指で自分の事を指さして意味もなくはにかんでみせる。

「あゝだったら、僕の代わりにお前の後ろで不気味に微笑みながら仁王立ちをしている姉貴に向かって一言言ってくれ」

「承知した。ホント、あのクソビッチは——」

「アゝキゝくゝん。あのクソビッチって誰の事かなあ?」

僕の代弁者たるアキトの背後から口元を歪ませ凄惨な笑みを浮かべながら抱きつき耳元で囁く、ク——水無月アスカ様……。

アスカ様のしなやかでお美しい腕がアキトの首に絡み、最初は抵

抗をしていたものの徐々にアキトの顔色が青ざめていき、目が白目をむき口から泡を吹いていた。それを特等席で目の当たりにしていた僕は手を合わせて、

「南無」

「まだ、死んでねえわ！」

ハアハア、とよっぽど苦しかったのだろう、アキトは肩をならし過呼吸のように必死に息を吸う。

「アキをいじめちゃだめよ。シゲル」

今し方、弟に行った教育(?)という名の暴力的行為は何もなかったかのようにアスカは微笑み、あたかも僕がやったかのように装う。

「直接手を下したのはお前だろうに」

僕は一応ながら後ろにいと教えてやったのだが、あの馬鹿が調子づいて口を滑らしたに過ぎない。決して誘導なんてしていないぞ。

「それはそれよ。そんな事よりもシゲルも私に何か意見がお有りなのかしら？」

笑顔のまま手と首をパキポキと鳴らし意見を言おうならば即手を下せるように慣らし始めた。

「いえ、何にもございません！」

僕はアキトの二の舞になるのだけは避けるべく、ご機嫌を損なわないよう椅子からすぐさま飛び上がり深深く土下座をした。腕が三角に綺麗に折れていたと思う。

ん？ プライド？ ナニソレ？ ヨコモジワカンナイ……。

「そう、ならいいわ。それと今日はもう解散よ。また、明日からよろしくね」

そう言い残してアスカは野郎二人を残してすたすたと部屋を出て行ってしまった。

僕は少し一安心して椅子の隙間を縫うように手足を伸ばして床に
転げ寝る。

「アキトゝ生きてるか」

「……ああ、大分マシになった」

肩をならして呼吸を整えていたアキトの生存確認を済ませた僕は
ゆっくりと瞳を閉じる。

『……はあ』

野郎二人の大きな溜め息が部屋の中で虚しく木霊した……。

序 章く死にたがりの少女く 前 篇 其の二

ちょうど一年前の入学式での事だ。

特にこれと言った趣味も楽しみもなく、毎日毎日作業のように決まった時間に起き、決まった時間に食事を取り。何気なく学校に通っていた僕は何のこだわりもなく適当に選んだ高校に進学して、これから新しい学生生活が始まるぞと言った心構えもなく。ただただ無心で桜が咲き誇り風が吹くたびに舞い散る桜が成形する桜の絨毯を歩いていた。

僕と同じブレザー制服を着てこれから始まる高校生活に胸を躍らせてはしゃぐ同級生達を目の当たりにして僕は思わず首を傾げた。

当時の僕に――いや、今でもそうかも知れないが意味の分からない光景だった……。

別に娯楽施設に向かう道中って訳でもあるまいし、何がそんなに楽しいのか。学校をテーマパークか何かと勘違いしている馬鹿なのか。

あるいは昔、中学の時に「学校楽しくない」などとぼざいていた輩がいたがアレと同じ類の人間で学校と呼ばれる場所に何かを期待している阿呆なのか……。

そんな考えを巡らせながら到着した、これといった特徴もないどこにでもある平凡な造りの公立高校……。適当に選んだだけあってこの学校の特色やら校風は全く分からないし、僕が通う高校はこの学校で合っているのかさえ分からない。

だけど、体育館らしき建物に向けて歩く僕と同じブレザー制服を着た生徒達が周りにいるのだから合っているのだろう。第一、僕は入試試験などで何度も来ているはずなのだが、はっきり言って全然記憶になかった。それどころか高校生になった実感すらなかった。

考え方や気持ちちが中学生の頃と何ら変わりが無いからなのか、た

ただただ通う場所が変わったという印象だけしかない。

ふむ、また退屈な作業の日々が始まるのか……。

演壇に立った校長なのか教頭なのか分からない中年代の男性が新入生に向けて話を始める。

周りの生徒達は演壇で流暢に話をする中年男性の話を真剣に聞き入っていたけれど、僕は校歌らしき歌詞が描かれた掛け軸のような物の近くにあった時計を眺めていた。早く時が過ぎるように念を込めて……。

はつきり言って苦痛だった。

季語を巧みに織り交ぜて上手く話しているつもりだろうけど、そんな事はどうでもいい。さっさと話を切り上げて解放してくれと願うばかりである。

すると、僕の想いが届いたのか話が終わり各々のクラスに向かう事となった。

他のクラスの生徒達の波に吞まれないように辿り着いた何の変哲もない教室で——一年B組の教室で僕は目を付けられてしまった。

いや、巻き込まれたと言った方がいいのかも知れない。

自席に座っていると突然、見知らぬポニーテールの女子生徒に「君は、生きているの？」と訳の分からない事を平然とした態度で僕の目を見て聞いてきたのだ。

生きているの？ と唐突に聞かれて呆気にとられながらも「はい、生きてますよ」と馬鹿正直に答えればいいのか分からずに黙っていると「私は、絶賛仮死状態中」とこちらは何も聞いちゃいないし何も言っていないのにも関わらず、女子生徒は嘆息交じりに訴えかけてきた。

この女子生徒がさっきから何を言っているのか全くもって謎だが、初対面の相手にする話では決してない事だけは理解できた。

「ねえ、退屈って人を殺すと思わない？ 私は殺すと思う。だって、生きてる心地すらないでしょ？」

僕の反応なんて知ったこっちゃないと言わんばかりに自論を展開する女子生徒に僕は少々気後れし、顔も引きずっていたと思う。

「だからね。君も私と一緒に生きたいと思わない？ 君を一目見た時にビビッと身体に電気が走ったんだ。私と同じ人種だとね……」

自分と同じお仲間を見つけて嬉しかったのか瞳を輝かせ、少し語気を荒げて言う女子生徒に僕は嫌気が差していた。

これが所謂空気が読めないって奴なのだろうか。ここまで人の顔色を間近で覗える距離でいるのにも関わらず話を繰り出せるってある種の才能を感じられる。それに傍から見ていると逆ポーズをされているように見受けられるし……。

「いや、一人盛り上がっている所すまないが……僕は君が思っているような人間じゃないと思う」

「いえ、君は私と同じく退屈の日々を暮らす死者も当然の存在よ。浮遊霊のように流れに身を委ねながらでいいの？ 私はごめんだわ。折角この人格で生を受けたのよ。だったらこの人格でしか味わえない人生を楽しまなきゃ損よ」

僕の言動で熱が入ったのか、バンと机を叩きさらに自論を展開する女子生徒。

ああ、火に油を注いってしまったな。さらに瞳をキラキラと輝かせている。それに思いのほか机を叩いた音が大きかったのか、周りにいたクラスメイト達が何事かとこちらを見つめているのに気付いた。

「君は生者になりたくないの？ 毎日が作業のような機械じみた

日々を送っていいの？ 私は嫌だわ」

それでも女生徒は周りの視線なんて知っちゃこっちなねえと一蹴するかのように声を荒上げて口走る。

ああ、分かった。これはアレだ。宗教か何かの怪しげな団体の勧誘なんだな。誘致人数のノルマを達成しないと現在置かれている地位から降格されるみたいなシステムか？ だから、ここまで必死に熱弁しているんだな。まるでマルチ商法みたいだ。

うん、だとしたらだ。周りのクラスメイト達を巻き込む訳にはいかないよな。目を付けられたのは僕なんだし……。

まあ、本音を言えばクラスメイト達の事なんてこれっぽっちも考えていない。さっさとこの状況を打破したい、ただそれだけだ。

「ああ、分かった分かった。降参だ。話なら後でたっぷりとどっぷりと聞いてやるからこの場は引いてくれ」

僕は息を吐いて女生徒の熱意にやられて少し心が折れたように見せた。もちろん嘘だ。この状況を打破されれば、僕の勝ち。後はとんずらすればいい。

「そう？ なら決まりね。じゃ、行きましようか」

女生徒は手を叩きそうという僕の腕を掴んで走り出していた。

僕は状況を飲み込めず呆気にとられる。この女生徒は僕の話聞いていたのか？

いや、これっぽっちも聞いちゃいないな。

半ば強引に僕は女生徒に引っ張られるような形で不本意ながら教室を後にする事になり、どういう道筋で辿り着いたかさえ分からない、とある部屋で僕は女生徒と顔がそっくりな男子生徒と出会う事になった……。

序 章く死にたがりの少女く 前 篇 其の三

アキトと学校で別れてから僕は一人寂しく家路を歩んでいた。

「はあゝ」

僕は学校を出てからずっとこの調子で溜め息を漏らしている。

本来ならこの日が最後の春休みだったはずなのだが、姫様のワガママに付き合う羽目になり休日がおじゃんになったからだ。

まさか、僕達三人で――いや、実質二人、か……。入学式の準備をする事になるなんて思いもよらなかった。それも当日の早朝にだ。無計画すぎる……。

こちらと気持ちよく安眠していたって言うのに禍々しい着信音が何度も何度も部屋の中に鳴り響き、しつこいから出るや否や「学校に集合！ 以上」と一言だけ言い残して切りやがり、こちらの反論の余地すら与えてはくれない暴君……。

やむなく学校に行き、椅子やらを体育館に並べて準備が終われば、今度は姫様の暇つぶしに付き合わせられる羽目になり短編小説を書く事になった。書き終わったら書き終わったで「つまらない」と一言で全てを一蹴し、僕たちの頑張りの結晶をテーブルに叩きつけて入学式が終わってからの片付けがまだ残っているっていうのに一人で帰ってしまう始末……。

全く……アスカのおかげで眠いし、しんどいしで散々な春休みの最後を迎える事になってしまった。

「はあゝ」

周りにいた通行人にも聞こえるほどの大きな大きな溜め息を僕は吐いた。僕はこの歳で苦労人なんだぞ、と少しアピール感を込めて

……。

そんな中、通学路である車やら通行人が往来する幹線道路をいつも通り黙々と歩いていると見慣れたはずの景色なのだが――なぜかこの時意味も分からず、いや意味なんてないのかも知れないが、とある一つの建物が目に付いてしまった。

僕の左手に木々や草花が生い茂る庭園のような敷地内に最近建てられたように錯覚させるほどの外壁が真っ白で茶色い屋根が特徴的な教会がぼつりと建っていた。

いや、存在していた……？

ふむ、元々あったのならさすがの僕でも覚えているはずなんだが……。って、毎日のように通る通学路だろうに覚えてない方がおかしいだろ。

しかし、幾ら記憶を遡ってもこの場所に教会があった覚えがない。それに周りの通行人達も見えているのか見えていないのかは分かりかねるが別に気にも留めていない様子だ。

でも、何だろうこのモヤモヤ感は……。

ただの勘違いかも知れないけど、ちょっと顔を出してみる、か……。

どのみち家に帰った所でやる事は一つしかない訳で――うん、寝るだけだ。

だったら、やむなく休日返上したこの最後の春休みだった日をアスカの言葉を借りれば、どんな状況だろうと楽しまなきゃ損よ、だ。

……ああ、アスカに毒された、かな？

僕は首を振って「大丈夫。毒されていない」と自分に言い聞かせてから幹線道路から逸れて教会に行く事にした。

板チョコがそのまま取り付けられたような扉のノブに手を伸ばし、何となくだがこういう神聖な場所に踏み入るのだから礼儀作法を忘れちゃいけないと思い扉を軽くノックをして、

「失礼しまゝす」

と、細々と言って僕は教会に恐る恐る足を踏み入れた。

教会内は窓から差し込む光に照らされ和やかな雰囲気包まれ、横長の古めかしい茶色い腰かけが綺麗に陳列し、何と言っても祭壇まで続くレッドカーペットの先にある人生初めて見るステンドグラスが圧巻だった。

「何ともまあ〜神々しいなあ」

僕は思わず口に出してしまった。

背中から純白な翼が生えた天使と思わしき女性の両腕に薔薇のツルが絡み吊し上げられており、華奢な両足には重りが付けられて身体を自由を奪われながらも微笑んでいた。

「ん？」

ステンドグラスから差し込む神々しい光の下で膝を付き、祈りを捧げる人物がいた。濃い紺色の服装からしてシスターさん(?)だと認識した。

「どうかしましたか？ 迷える子猫ちゃん」

僕の気配に気づいたのか突然、シスターさんは祈りをやめてこちらを微笑みながら振り向いた。

「邪魔しちゃいましたか？」

そう言いながら僕は辺りをきょろきょろと見渡しながらレッドカーペットを歩きシスターさんの元へ足を進める。

「そうですね〜」

シスターさんは立ち上がりながらそう呟くと、

「ちょうど、よかったんじゃないでしょうか？」

顎に指を添えて微笑みながらそう続けた。

ふむ、なんだかミステリアスな感じの人だな。服装がら顔でしか

判断出来ないが、少し幼さが残る顔立ちから推測するに同年か年下？ まさかの年上って事はない、よな……。

でも、同年だろうが年下だろうが敬語を使いたくなるのはなぜだろう？

シスターさんだから？

それとも、彼女が少し幼さが残る顔立ちの割に年上と思わせるような大人な雰囲気を漂わせているせいかな？

ふむ、それにしても修道服が似合ってるな。

彼女のためだけにこしらえられた衣服に思えた。何もかもを包み込むような優しい笑顔が要因なのかも知れないな……。

「私の顔に何か付いてますか？ 迷える子猫ちゃん」

まじまじとシスターさんの顔を見ていたのがバレたのかそう言うってから何の計らいかは分からないが顔を近づけてきた。

吐息が掛るか掛からないかのすんでの所まで顔を近づけて来るもんだから、僕の心臓はバクバクである。

「いえ、何でもありません。って、さっきから気になってたんですけど『迷える子猫ちゃん』じゃなくて『迷える子羊』じゃないんですか？ それに子猫ちゃんって主に女の子に向けて使う言葉だと思っんですけど……」

僕は冷静を装いながら視線を逸らして誤魔化すようにシスターさんにそう告げる。

「ふむ、言われてみればそうかも知れませぬ。じゃ、訂正しますね。迷える子犬君」

と、満面の笑みで名称を変えてきたシスターさん。

うーん、悪気はないんだろうけど何だろうかこの納得しかねる気持ち……。

「どうでしたか？」

「いえ、何でもありません」

「そう、ですか？」

首を傾げて少し不満気な表情を浮かべるシスターさんに僕は吹けない口笛を吹いて誤魔化してみる。

「――神に誓ってですか？」

僕の不審な行動を怪しんだのかシスターさんは眉をひそめて、地の利を生かした最凶の詠唱魔法を唱えてきた。

「天国にいる――ジョンに誓って……」

うん、自分自身にツツコミを入れようと思う。ジョンって誰だ？

「……分かりました。そのジョンさんに免じて信じましょう」

ようやく納得してくれたシスターさんは静かに微笑んでくれた。良かった。これで天国にいるジョンも報われるな……。

うん、分かってるって。やればいいんだろ？

せえゝのっ！ ……ジョンって誰だよ。

「さて、迷える子犬君は一体何の為にここに來たのですか？」

「んゝ単なる寄り道、かな？」

「寄り道、ですか……？」

寄り道って言葉に引っ掛かったのかシスターさんは俯き少し陰い表情を浮かべた。

さっきまでのミステリアスの雰囲気から少しピリツとした感じが見受けられる。やはり、お祈りの邪魔をしてしまった事を怒っているのだろう。いくら聖職者だろうと寄り道を理由に大事なお祈りの時間を邪魔されたんだ、怒ってない訳がないだろう。

「すいませんでした……」

僕はシスターさんに深深くお辞儀をした。

それぐらいの事をしたのだから当たり前だろ？

「……えっ？」

僕の行動を見てシスターさんは呆氣にとられたのか少し間の抜けた声を上げた。

「いや……やっぱりお祈りの邪魔をしてしまった事を不快に思っているんじゃないかと思って……」

「いえ、そういう事じゃないですよ。うん、そうですね……。これも何かの縁ですし、迷える子犬君は何か悩み事は無いですか？」顎に指を添え少し首を傾げてシスターさんは僕にそう尋ねてきた。

「悩み事です、か……」

ふむ、突然そんな事を聞かれてもなあ。ここはあれか、悩み事が無いのが悩み事なんですよって、茶目っ気たっぷりと言う所、か？

「あつ、ちなみにですよ。悩み事が無いのが悩み事とか言うのはなしですよ。君は見るからに捻くれた方のですし」

シスターさんは眉間にしわを寄せジト目で僕の事を見つめてきた。「そ、そんな訳ないですよ。僕は正直者で名が通ってますよ。そうですね、悩み事じゃないんですけど、あのステンドグラス——」
「たまたまだろうけど、考えていた事が見抜かれてしまい僕は少し焦ってしまった。」

誤魔化すために少し声を上擦ってしまったけれど、咄嗟にしては好プレーだったと自画自賛してみる。

「ああ、あれですか。私には理解出来ませんね……」

「え？ 何ですか？」

露骨に不快感をあらわにしたシスターさんに僕は首を傾げて尋ねる。

「腕と足を縛られて笑みを浮かべているんですよ。ありえないですよね？ 普通、亀甲縛り＋吊りし上げにボールギャグを施されてやっと悦を感じられるかどうかというのに……。全く、甘いです

よ」

真顔でそう語る聖職者。いや、性職者に僕は少し立ち眩みがした。全く、どこが好プレーだ。失策じゃないか。好プレーだと自画自賛していた数秒前の自分が恥ずかしい！

ん？ 今のはさりげなく自分の性癖を暴露——いや、考えすぎだ……。

「まあ、今のは冗談ですけど、あら？ 少くし残念そうな顔をしてますう？」

不気味な笑みを浮かべてシスターさんは僕の顔を覗き込むように詰め寄ってきた。

「まさか、僕は紳士ですよ。そんな訳ないです」

思わぬ問い詰めに少し後退しながらも首を振って否定する。

この人、狙ってやっているんじゃないだろうか？

「それはさておき……」

馬鹿な流れを変えるかのようにシスターさんは手を叩いて一拍入れた。

そして、瞳を閉じて小さく息を吐いた後に瞳を開いたシスターさんの雰囲気は先ほどのお茶らけたモノからキリツと真剣な雰囲気へと変貌した。

僕はシスターさんの真剣な眼差しに息を吞んで、こちらもそれなりの対応を取らねばと心を落ち着かせて臨む事にした。

「……迷える子犬君は探し物がありますか？ 例えば、自分探しとか」

「いえ、特には。それに自分を見失うほど落ちぶれちゃいけませんよ。たぶん……」

「なるほど……」

僕の返答に対して真剣な面持ちで頷いてみせるシスターさんに僕はこの質問には何かそこまで考えさせるほどの真意が隠されている

のかと思い、聞いてみる事にした。

「あのく頷いてますけど、この質問に何か意味はあるんですか？」

「あつ、特にないですよ」

「ないのかよ！」

あつ、思わずタメ口でツツコミを入れてしまった……。

いやいやいや。あの真剣な表情で質問されたからには何か思惑でもあったのかと思うだろうに普通。でも、蓋を開けてみると何もないうって——そりゃ反射的にタメ口になってツツコミを入れてしまいますぜ、ダンナ。

「ふふふ、やっと本性を現しましたね。さっきから気になってたんですよ。その不似合いな敬語」

身体を震わせながら不気味に微笑むシスターさんの姿がそこにはあった。何て言うか、してやったりと言った感じで僕の事を見つめていた。

「……そんなに違和感ありましたか？」

「ええ、大あります。大人の遊園地と謳っておきながらその中で繰り広げられるイベントの数々が全て幼稚染みているぐらい違和感があります」

プンプンと少しお冠なのか頬を膨らませながらそう述べた。

そんな彼女に対して額を押えて頭を悩ます少年が一人、大きな嘆息と共にがっくりと肩を落とす……。

えっと……これはどう処理をしたらいいんだろうか？ この人が言う、大人の遊園地って言うのは疲れた体を癒す大人たちの最後の楽園（ただし、有料）の事だろ？

それにシスターさんが発した言葉から推測するに——大人たちが唯一幼少期に戻る事が許される場所のようだ。

ふむ、だったら僕に言える事はただ一つだな……。

「シスターさんが言うそこは大人の遊園地じゃなくて大人の幼稚

園の事じゃないかな？」

うん、実に柔和に表現された言葉なんだろうかと、自画自賛してみる。

僕の言葉に納得してくれたのか、シスターさんは感慨深く頷いて「なるほど」と小さく呟いていた。

「……つまり、幼稚プレイ専門の場所って事ですね」

真顔で述べられたその言葉に僕は膝を付いて崩れ落ちる。気のせいか、少し口の中が鉄っぽい味がした。ああ、これが大人の味と言う奴か……。

しかし、この人……折角、僕が柔和にフォローしてまとめてあげたと言うのに全て台無しにしゃがった。それに膝を付いて崩れ落ちた僕の事を不思議そうに首を傾げながら見つめるその様に少し憤りを感じずにいられないな。

何なんだ？　ワザとやってるのか？

それとも、天然でやっているのか？

もう、訳が分からん……。

「……あのくどうかししましたか？」

そんな僕に少し心配そうな表情を浮かべながらシスターさんが話しかけて来た。

いかんいかん……。僕はもう少し、クールだったはずだ。なのにここに来てからペースが乱れまくっているな。まるで、水無月姉弟（特にアスカ）と接しているみたいだ。

なんつうか手応えがないんだよね。ひらりとかわされているって言うより軽くあしらわれているような感じで……。

もう、いいや。敬語なんて使っているからペースが乱されているんだな、きつと……。

「……ああ、大丈夫だ」

僕は敬語を諦め、タメ口でそう答えた。そして、身体を揺らしながらゆっくりと立ち上がって平然を装う。

「そろそろ、お暇しようかな」

立ち上がり際にそう告げるとシスターさんはきょとんとして少し間の抜けた表情を浮かべた。そんな彼女の態度の僕は首を傾げる。

「もう、帰っちゃうんですか？」

少し名残惜しいのか上目遣いで訴えかけて来たシスターさんに不覚にもドキッと動悸がして、少し顔が熱くなった。

「いや……ほら、あまり長居したらシスターさんに迷惑かなって少し心もとない態度ながらも照れてしまったのを上手く誤魔化せたいと思う。その僕の言葉にシスターさんは納得してくれたのだろうか、軽く頷いてみせた。

「……そうですね。お互い、色々と都合がありますし、ね」

どこか物寂しさを彷彿させるかのような憂いた表情を浮かべながら話したシスターさんの印象が何か妙な違和感を感じられずにいらなかった。

まるで、これが最後のお別れのようなそんな錯覚を思わせた。

「……じゃ～僕はこれで」

「はい、お見送りをします」

ゆったりとした足取りで僕たちはレッドカーペットを歩き、板チョコがそのまま取り付けられたような扉のノブに手を伸ばしてゆっくりと扉を開けた。

扉を開けた瞬間、日の光がちょうど真正面から差し込み思わず目を細め、手で少し遮る。

「それじゃ～また」

「……近いうちにまたお会いしましょう」

小さく手を振って微笑みながらシスターさんに見送られながら僕

は不思議な雰囲気を漂わす教会を後にした……。

序 章く死にたがりの少女く 前 篇 其の四

――翌日。

毛布の心地の良い感触を名残惜しみながら今日から始まる新学期……。

僕は無事、進級をして本日から二年生となる。しかし、特にこれと言った特別な思いがある訳でもなくいつも通りの朝を迎える。

二階にある自室で、ある程度の支度を整えてから一階の居間にいつも通りに向かう。

居間のテーブルに置かれた朝食を時間たっぷり使って食べる。普段なら悠長な事をしていられないかも知れないが今日は午前中、始業式をやる事になっている。

だから、僕は始業式だけをすっぽかしてどのクラスに編成されるかを確認しに行くだけの予定を立てていた。

別段、始業式に行かなきゃなんほど重要な事でもないし、僕と同じような考えを持つ生徒が他に結構いたりする。

ふう〜、そろそろ行くのでしょうか……。

僕は食べ終わった食器を水でさらして、後で洗えるように施しておく。そして、少しダルさが残る身体に鞭を打ちながらのそのそと玄関に向かって進み、家を後にする。

ラッシュ時を大幅に過ぎた時間帯に家を出たものだから、通勤学者はほとんどいない少し寂しい道中を黙々と何気なく歩く少年が一人……。

見渡す限り人っ子一人、車一台も通らない道を歩く様は何だかこの世界の最後の生き残りのような錯覚さえ感じた。この静寂さがそう強く思わせているのだろうか、それとも……。

そんな馬鹿っぽい考えを巡らせている内に僕が通う平々凡々な公

立高校に辿りついた。

ちょうど始業式が終わったのか、生徒達の憩いの場所たる中庭に人がぞろぞろと集まり出していた。その中庭に僕が求めるモノがある。

僕は人ごみを掻き分けながら校舎の壁に沿って置かれたクラス表を覗き見ようと、試みたその時、背後から誰に思いっきり引っ張られ後ろに戻された。

不快感をあらわにしながら僕はそいつを睨みつけるために振り返る。すると、ニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべている見慣れた輩がそこにいた。

「キッサラくん。お前、また式をばっくれただろ」

僕の肩に暑苦しく手を回して、気色の悪い笑みを近づかせて来た男子生徒、水無月アキトが苦言を呈してきた。

「別にいいじゃん。そんな事よりも僕はどのクラスになったか確認しなければならん」

「ああ、それなら心配いらないぜ。俺達一緒のクラスになったからな」

「はあ？ お前と一緒？」

「そう、それと姉貴も一緒だぜ」

「マジか……」

アキトの言葉を聞いて僕は愕然とした。別にアキトと同じクラスになった事を嘆いた訳ではない。むしろ、後者の人物に対してだ。

水無月アスカ——一年の時もそうだったが、まさかまた同じクラスになるうとは思ってもよらなかった。誰だ、このようなクラス分けをした輩は……。僕に何の恨みがある？

それに片割であるアキトまでもが一緒のクラスとなると、思い当たる節は一つしかないなよな。暴君の抑止力たる生贄を二名用意したって所、か……。

はあゝ。急遽、親の仕事の都合か何かで転校出来ないかな……。

「ん？ どうしたんだ、キサラ」

「いや、転校ってどうやったら出来るのかなって」

「……登校初日からお前は一体何言ってるんだよ」

「……お前、アスカと同じクラスなんだぞ。その意味分かってい
るのか？」

「……それを言うなら俺なんか姉貴と血の繋がった姉弟だからな。
だから、キサラの一、二年間なんて俺にとったら一、二分程度だ。
我慢しろ」

「ねえゝ。何を我慢しろってえゝ？」

『うわっ！』

聞き覚えのある女の子の声が聞こえて、僕達は思わずワザとらし
いリアクションをして驚いた。

そして、恐る恐る声が聞こえた後方へと視線を向けるとそこには
怪しい笑顔で僕達を見据える美少女が――いや、美少女の皮を被っ
た鬼神がそこにいた。

鬼神は僕達の肩を人知を超えた力で握りしめて、その苦痛に僕達
は表情を歪める。

「あ、アスカ様いらっしやったんですか……」

「お、お姉さま。ご機嫌麗しゅう……」

「あら？ 二人とも普段と口調が変わっているけど、どうかした
のかなあ？」

不気味に微笑みながらそう話したアスカ様はさらに力を込めて僕
達の肩を握りしめる。僕達の肩からパキポキと怪しげな音が鳴り始
めた。

アスカの人知の超えた力で肩を握りしめられているせいで僕達の
肩が限界に達して悲鳴を上げているようだ。それに身体から変な冷

や汗が流れ始めている。

ふむ、このままでは粉砕骨折へ直行か……。南無うだな。

すると、唐突に大きな溜め息を吐いたアスカは僕達の肩から手を離れた。解放された僕達の肩は粉砕骨折を免れたが、未だに激痛が走っていた。

「まあいいわ。そんな事よりも私達のクラスに転入生が来るみたいなのよ」

少し興奮気味に語気を強めて発せられた言葉からは何かを期待しているのか、ウキウキ感が伝わってきた。

「ああ、俺もその話を聞いたわ。何でもかなりの美少女らしい」

「へえ。転入生ねえ。何でまた？」

「そんな事知る訳ねえだろ」

「まあ確かに」

「でも、気にならない？ その美少女と謳われている転入生が果たして、私の地位を脅かすほどの美少女なのかって」

真顔で自意識過剰発言をした少女に僕は思わず口を開けて馬鹿面をさらしてしまった。

いや……。確かにコイツがこういう性格だって一年も付き合い合っていたら自ずと分かっては来るが、こうも堂々と公言されちゃうという反応をしていいか分からなくなるだろう？

アスカが外見上、非の打ち所のない美少女なのは確かなのだが、中身が……。ワガママ姫と言うかおてんば姫と言うか、まあ一言で纏めるなら暴君、独裁者だな。

そんな彼女の被害を一番に被っているのは弟のアキトかも知れないが、僕もその一人になりつつあるな。いや、もうなっているか……。。

僕が馬鹿な考えにふけっているとチャイムが辺りに鳴り響いた。

「やべ、そろそろ教室に行かないと」

チャイムの音を聞いたアキトが辺りを見渡しながらそう呟く。

「そうね。アキ、シゲル。さっさと教室に行くわよ」

アキトの言葉に頷きながらアスカは僕達に行くように促す。その言葉に僕達は軽く返事をしてから自分達の教室へと足を進めた。

僕は新しい教室の場所が分からないため、水無月姉弟の後を追うように歩いた。廊下を歩き階段を上がって、また廊下を歩いて辿り着いた三階のとある教室――二年C組と表札がぶら下がっている教室に入り、黒板に各々が座る座席表が描かれていた。

僕の席は幸運な事に後列の席だった。でも、その束の間の至福は無残にも打ち破られてしまう。僕の席は中庭を臨める窓側の席（黒板を正面に左）から二番目の席で、そこまでは良かった。だが、その席の左隣にはあの暴君が座り、暴君の前にはアキトが座った。なんつうシフトだ、と僕は思った。

僕とアキトで暴君の妨げを担う最後の砦として敷かれた布陣みたいだ。

ホント、僕に何の恨みがある？ 悪意を感じられる。

しばらくしてからこのクラスの担任教師らしき人物が現れた。何の特徴もない平々凡々な中年男性だった。

ん？ そういえば……僕の前の席が空いているみたいだけど、まさか転入生の席って事は無いよな。いくら何でも初見の方には荷が重すぎる席だと思うぞ。特に左斜め後ろの要注意人物がな……。

「じゃー予め聞いていると思うが転入生を紹介する」

教卓の前で担任教師がそう宣言した瞬間、クラスメイト達が一斉にざわざわと騒ぎ始めて色々と思測を流し始めた。

ある男子生徒は帰国子女なんじゃねと話し。ある女子生徒はどこかの国のお姫様なんだってと話す。

ホント、どれもこれも馬鹿な推測でこの国は平和だなあ〜と僕は

年寄り臭くしみじみと思っていると、ガラガラと音を立てて前の扉から綺麗な黒髪をなびかせながら凛々しい物腰でゆっくりと入って来た噂の転入生さん。

少し幼さが残る顔立ちで血が通っているのかさえ分からなくなるほどの透き通るほどの白い肌質、すらりと伸びた手足のスレンダーな体躯――うん、噂通りの美少女なんじゃないかなと思う。アスカの地位(?)を脅かすかどうかはさておき……。

少女は凛々しい物腰でゆっくりと教卓の方へすたすたと足を運ぶ。そんな少女の容姿を目の当たりにしたクラスメイト達は先ほどまで騒がしかったのにも関わらず、一瞬にして物静かになった。

教卓まで足を運んだ少女は黒板に自分の名前らしきモノを書き始め。書き終わったのか、こちらを振り向いた少女の顔はどこか物寂しげな表情を浮かべていた。

ふむ、気苦労が絶えないのかねしぐれはるかなんて、考えながら少女の背後にある黒板に目をやる。そこには時雨悠と振り仮名まで丁寧に書き記していた。

「私は……」

自己紹介をするのか唐突に声を上げた少女だったが、途中で口ごもった。

うん、大勢の前で自己紹介する事になったんだ、緊張しない方がおかしいだろ。

少女は気持ちを切り替えるためか、瞳を閉じてゆっくりと深呼吸をした。そして、ゆっくりと瞳を開いて、

「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」

と、冷たい眼差しで淡々とそう語った……。

第一章　死にたがりの少女と女王様の戯れ　其の一

突然の告白にクラスメイト達は何の事か分からずフリーズし、隣に座る暴君に至っては良い人材を見つけたわと言わんばかりに羨望の眼差しを少女に向けていた。

少女は何事もなかったようにすたすと僕たちが座る座席に向かって歩み寄って来て、僕が座る前の空席に静かに座った。

「……え、これから今後の説明をしようと思う」

この教室に漂う変な空気を変えるべく立ち上がった勇者――担任教師が開口一番に口を開いて、今後の説明（自分の自己紹介や日程について）を始めた。

担任教師の話にフリーズをしていたクラスメイト達は我に返って、担任教師の話しに耳を傾き始める。そんな中、とある女子生徒だけは教卓の前で熱弁する担任教師じゃなく皆をフリーズさせた転入生に熱い視線を注いでいた。

「なあ、アンタ。どういう真意であんな事を言ったんだ？」

僕は何を思っただか、転入生にコンタクトを取ってしまった。ホント、自分自身にびっくりだ。まあ、でも、見ず知らずの輩の言葉なんてスルーされるだろう。

「そのままの意味よ。それとモブの分際でこの私に気安く話しかけないでちょうだい」

と、スルーされるかと踏んでいたのだが、淡々と前方を見ながら罵声を浴びさせられた。

まさかの罵声に僕は胸を押えて机に項垂れてしまう。

冷たい机に顔を付けてクールダウンした僕は先ほどの罵声は何か

の空耳だろうと考えてもう一度転入生に話しかける事にした。

「なあゝアンタの事を熱い視線で見つめる輩が――」

「私のさっきの言葉が理解出来なかったのかしら？ モブはモブらしく話しかけられるまでその辺を往来しときなさいな」

こちらを振り向く事無く淡々とまた僕に罵声を浴びせる転入生に僕はまた胸を押えて机に項垂れてしまった。

しかし、僕は果敢にも攻めようと思う。

ほら、一応ながらこの学校に通っている先輩として色々アドバイス（ほとんどないが……）をしないといけないだろ？

「……あのさあゝ」

「ああ、ごめんなさい。これは私のうっかりミスね。アナタはモブじゃなくただのドットだったわ。ほら、ここにアナタが――」

と、言いながらこちらに振り向き転入生はメモ紙を僕に提示した。やっとこさこちらを振り向かせる事に成功した僕は少し浮足立っていたが、彼女が提示したメモ紙に目をやるとそこには黒ゴマのような小さな点が描かれていた。

えっと――つまり、この黒ゴマのような小さな点が僕だと言うのか……。ふむ、なぜだろう親近感が湧いてきたや。それになんだか、目頭が熱くなってきた……。

すると、僕がそのメモ紙を見た事を確認するや否やぐしゃりと握りつぶして、床に落とし足で思いっきり踏み潰した。

「あら、手が滑ったわ」

「ギャー！ もう一人の僕があ！」

思わず僕は大声で叫んでしまっていた。

その声にクラスメイト達は一斉に僕の方に振り向き、羞恥の目にさらされる。

「そこゝうるさいぞゝ」

熱弁している最中に大声を発したものだから担任教師に注意されてしまい、クラスメイト達がくすくすと笑い始めた。

そんな憐れな僕に対して転入生は不気味な笑みを浮かべながら、未だに床に落としたメモ紙を力強く踏み潰していた。

ああ、胸が痛い……。

僕は胸を押えて項垂れる。その間にチャイムが鳴り響き、クラスメイト達は帰る支度を始めた。

はぁ、やっと帰れるか……。この傷だらけの身体を早よう癒したい……。

そう心に思いながら僕もクラスメイト達に見習って帰り支度をしようとした矢先、妙な視線を感じた。

……なるほど、そう易々と帰れないって訳か……。

大きく嘆息をしながら、その妙な視線を感じる方向に視線を向けると――うん、言わずとも分かると思うが、暴君降臨である。

「シ〜ゲ〜ル〜く〜ん。彼女と何を話したのかなぁ？」

怪しく微笑みながら転入生に聞こえない程度の声量でアスカが話しかけて来た。

自分が先に目を付けていた獲物を先に手を付けられてしまい、目が獣のように鋭く光って恐ろしいモノになっていた。

「別に他愛もない話だよ」

そう、本当に他愛もない話だ。

一人の少年の心がずたずたにされた事以外はな……。

淡々と返答した僕の言葉にアスカは眉をひそめて怪訝そうな表情を浮かべる。

「へえ〜他人に興味がない。如月瑞希君がまさか見ず知らずの転入生に積極的に声をかけるなんてねえ〜。ホント、不思議な事がある」

るものねえ。相手が陰りのある美少女だからかしら？」

不敵に微笑みながら嫌みったらしくネチネチと口撃を繰り返したアスカに僕は額を押えて大きく嘆息をした。

アスカが僕のフルネームを織り交ぜて口撃をする場合、本当に機嫌が悪い時だ。

これは確証が無いんだが――アスカと初対面の時、僕がほぼ総スルーで素っ気ない態度を取っていたにも関わらず、この転入生には自分から積極的に声をかけてコミュニケーション図った、この態度の差に不快感を示したと思われる。

いや、誰だって宗教勧誘みたいな話を独り言のように語られて、まともな対応なんて出来ないだろ。

……うん、それもあるかも知れないが、あの頃の僕って良い意味（いや、他人から見たら悪い意味、か……）で出来上がっていたから、他人に対して素っ気ない素振りを見せていたっけか……？

「で、結局シゲルは彼女とどんな会話を交わしたの？」

「いや、本当に何もないよ。そんな事よりも転入生様とコンタクトしなくていいのかよ」

「彼女なら早々に帰ったわよ」

その言葉に僕は転入生が座っていた座席に目をやった。すると、アスカの言葉通りそこには誰も居なかった。

「……お前が目に掛けた獲物を逃がすなんて珍しいな」

「誰が狩人よ。でも、彼女結構骨が折れそうだから、長期戦は覚悟の上よ。どうせ、同じクラスなんだし……」

拳を強く握り締め、闘志をメラメラと燃やしてやる気を見せた。何て言うか、どこからそんなやる気が湧いてくるのか分からないなあ。ただ言える事は自分を楽しませてくれそうな玩具を見つけて喜ぶ子供って感じだな。

はあ。転入生――アンタに同情するよ……。

ん？　　そういえばアキトの奴はどうしたんだ？　一向に姿を見せないが……。

「なあゝ。アキトは？」

「アキならもう先にいつもの場所に行ってるわよ」

「つて、言う事は……」

「さっさと行くわよ」

「……はあゝ」

行く際に溜め息を吐いたらアスカに睨まれて少し身体がビクツと身震いした。

ああ、怖……。

しかし、一体何を企んでいるんだコイツは……。どうせ、ろくでもない事を言い出すに違いない。

少々、頭を悩ませながら僕たちはアキトが待つ、女王様の私室へ向かう事にした。

女王様の私室と言ってもやや広めの部室なんだが、アスカが自分の部屋のように好き放題にリフォームをして私物と化している。

ホント、どうやって手に入れたんだか……。

本人の話ではもらったと言っていたんだが、公共の建物の一室をただの女子生徒がもらえる訳がなかりうに。一体、何を仕出かしたんだ？

「何、難しい顔をしているのよ」

表情に出てしまっていたのか少し呆れ顔でそんな事を言われた。

「いつも通りだろ」

淡々とした口調で返し、再び足を進める。

階段を下りたり上がったりとせわしなく進み、ようやくたどり着いた部室棟のとある一室の前で立ち止まる。

そして、ゆっくりと扉を開くとそこには部屋のご真ん中に置かれたガラステーブルの上でアキトが横たわっていた。

何やってんだ、アイツ……。

僕はアキトの様子を窺うべく彼が眠る元へと足を進めた。

うん、何とも微笑ましい光景だろうか……。アキトは白目を向き白い泡を吹きながら熟睡しているようだ——って、え？

僕はもう一度、アキトの事をじっくりと見つめて検証してみようと思う。

まずは、目だ。白目を向いているが……これはセーフだな。白目を向いて寝る方が少なからず世界で一割ほどいるとどこかで聞いた事がある——ような気がする。だから、これは問題視する事ではない。

じゃー何がおかしいんだ？

口から吹いている白い泡か？

確かに傍から見れば、おかしな光景かも知れない。しかし、涎が凝固して白い泡を吹いているように見えているだけかも知れない。

その可能性も否定出来ないだろう？

じゃー何だ？

アキトの傍らで転がっているドクロのマークが描かれた怪しげな瓶が原因か？

でも、今どきこんなあからさまなモノに毒薬みたいなものは入っている訳ないだろ。どうせ、生産者が茶目っ気たっぷり造った代物だろう……。

うん、結果は出たようだな。

アキトは稀な寝方をする少年だったようだ。

「……すっごい効き目」

突然、ぼそつとそんな言葉が聞こえてきた。

振り向くまでもない、この部屋には僕と熟睡中のアキトともう一人、アスカしかいない。したがって僕以外の人物となるとアスカが言った事になる。

ふむ、どういう意味なのだろう。これは聞くべきなのか、聞かざるべきなのか……。

すると、アスカが何食わぬ顔ですたすとアキトの元へ歩み寄って行き、何を思ってたかアキトの手首を軽く握る。

「……脈はあるみたいね」

アキトの手首を握りながら不吉な事を言い出した。

全く、脈があるに決まってるだろ馬鹿野郎。アキトはただただ珍しい寝方をしているだけで決して天に召されている訳じゃないだよ、馬鹿野郎。

さてと、とアスカが呟きながらいつもの定位置（この部屋で一際目立つ豪勢な造りの机）に向かった。

それを見て僕もいつもの定位置に向かう事にした。

ここアスカ様の私室は教室ほどの広さがあり、部屋のと真ん中には現在アキトがベット代わりに使用しているガラステーブルとそれをはさんでふかふかのソファアが置かれている。

僕とアキトの二人はいつもそのソファアで座り、この部屋の持主たる本人は豪勢な造りの机に腰掛ける。

ほかにこの部屋には冷蔵庫やらテレビやらの備品が充実しているので、本当に自分の部屋のようにくつろぐ事が出来る。

「で、アスカ。今回は何を仕出かすつもりだ？」

ソファアに深くもたれかかってまるでどこかのVIPのような態度で目を細めながらアスカに問いかける。

アスカはゆっくりとした動作で机の上で腕を組んで僕たちの事を見据えた。ふう〜と感慨深く息を吐いてたっぷりと間を開ける。

この緊張感が漂う雰囲気にあてられてか、僕も固唾を呑んでアスカが話し始めるのを見守る中、ようやくアスカが徐に口を開こうと

したその時！

「ぶはあく！ ぜえく。ぜえく。ぜえく……」

目を覚ましたアキトは目を見開いて身体を揺らしながら必死に呼吸をする。

ふむ、何か悪い夢でも見ていたのか、少し額から冷や汗が滲み出ているようにも見える。それにスローモーションでアキトが起き上がる所を再生したらホラー映画を彷彿させるような様相だった。

「俺を殺す気か！」

怒号を上げながら豪勢な椅子に優雅に腰掛けるアスカを睨めつけたアキトに対して、姉も引けを取らず睨み返した。

アスカの鋭く殺気の込められた睨みにアキトはビクツと身体を強張らせて小さく縮こまってしまった……。そのまましょんぼりとしながらアキトはゆっくりとガラステーブルから降りて僕の向かい側のソファアーに座った。

「で、そろそろ話したらどうなんだ？」

一連の流れで少々台無しになった緊張感を再び戻すかのようにアスカは僕たちの事を見据えて、小さく息を吐いた。

「……時雨悠を殺してみようと思うの」

淡々とそう話したアスカに僕たちは意味が分からずきよとんとして間抜け面をさらしてしまった……。

第一章　死にたがりの少女と女王様の戯れ　其の二

これはとある童話の話だ。

仲の良い双子の姉弟がいました。

姉は絶対的暴力を用いていつも弟や周りの人物達を屈伏させては、自分の玩具として楽しんでいました。

そんな姉に対して弟はそれ对自己に対する愛情表現なのだと言んだ感情が芽生えていつしか姉の姿ばかり追いかけていました。

ある日、律義な弟に姉はとある命令を下しました。

この薬を飲んで死ぬか。

それとも、私の手によって殺されるか。

どちらか選びなさいと、一方的に言われました。もちろん拒否権はありません。

弟は姉から受け取った怪しいマークが描かれたガラス瓶を見つめながら必死に考えました。

そして、考えてからたった数分で結論を出した弟は「ふん」と鼻で笑いながらどこか清々しさを感じさせる表情で怪しいマークが描かれたガラス瓶に手を伸ばし、一気に飲み干した所でこの話は終わっている。

果たして、弟はどうなったんだろうか……。

まあそれはさておき――アスカが唐突に発した言葉にはこの場にいる僕達はもちろんの事、世界中の人々が聞いてもポカーンとする事間違いないだ。

時雨悠を殺してみる……？

意味が分からん。こいつはどうとう人殺しにまで手を染めなければならぬほどの欲求不満の強欲女に成り下がったのか？

「……ちょっと、聞いているの？　二人とも」

反応がない僕たちにアスカは少し呆れ気味で尋ねて来た。

「いや、聞いてるちゃ〜聞いているが……」

「じゃ〜何？」

「姉貴が突然、変な事を言い出すからさあ。俺達どう反応していいやら分かんなくなっただよ」

弟の言葉に姉のアスカは首を傾げてきよんとする。

その反応に僕たちがきよとんだわ……。

「別に変な事なんて言っていないわよ。私はただ時雨悠を殺したいと言っただけ」

何食わぬ顔で淡々とまたおかしな事を言い出したアスカに僕たちはもう何が何だか分からなくなり、今この時どういった表情を浮かべているのかさえ分からなかった。

それでもやはり、アスカがなぜそんな馬鹿な事を言い出したのか問わねばならない。

僕は二、三回小さく深呼吸をして気持ちを切り替えた。

「それが変なんだって。何で、転人生を殺さなきゃなんのだ」

僕のこの言葉にアスカは小さく息を吐いて、ゆっくりと瞳を閉じた。

そして、瞳を開けて徐に口を開く。

「……アンタ達は知りたいと思わない？　なぜ、彼女があんな事を人前で言い出し……そして、なぜ死にたがっているのか？」

『それは……』

「私は知りたいわ。だって、私達はこれだけ生者であろうと努力をしているのにも関わらず、何ら変わらない退屈な日々を過ごす亡霊——浮幽霊でしかないのよ。それなのに生者から死者になりたいですってえ〜？　冗談じゃないわ！　私達は好きでこの地位に甘んじている訳じゃない。必死で必死でそちら側に行こうと頑張ってい

るのよ！」

語気を強めて興奮気味ながらも流暢な口調で語ったアスカに僕達は少しホッとして安堵の表情を浮かべた。

それは彼女が色々履き違えて転入生の言葉を解釈しているのだと分かったからだ。

転入生が言った言葉はそのままの意味合いを持つモノだろうけど、アスカのモノは違う。アスカは自ら（僕達も含む）の事を亡霊、浮遊霊、死者などと表現している。それは退屈な日々なんて生きてる心地がしないと揶揄した所から生まれた言葉だった。

つまり、退屈しない日々を過ごす者達（所謂、リア充って呼ばれる奴か？）の事を生者と称している彼女にとって死にたいなんて発言は言語道断であった。

自分がどうやっても行けないそちら側にいるくせに小娘の分際でこちら側に来たいなどと気安く言いやがり怒り心頭のアスカ様って感じた。

まあそれはともかくとして、さすがのアスカも自分の退屈を埋めるために人を殺そうなんて馬鹿な考えはしない、か……。でも、一時自分が生者になれないのは髪型のせいだと考えたアイツは色んな髪型にチャレンジしてたっけ？ 最終的に「何も変わりやしないわね」と結論付けて長髪だった髪を「うざい」との理由で適当に短く切ってぼっさぼっさの髪になってたな……。今となっては懐かしい思い出だよ。

「で、アンタ達はどう思う？」

やはりご立腹なのか凄い剣幕で僕達の事を見据えて意見を仰いで来た。

「どう思うも何も——転入生が言ったあの言葉の真意はアスカが思っているモノとは違う。全くの別次元の話だぞ」

「そうそう。時雨さんが退屈な日々を過ごしたいと姉貴は解釈したみたいけど、当の本人は本当の意味での死を望んでいるみたい

だぜ」

「は？ 本当の意味での死って何？ これ以上の何かが他にもあるって訳？」

彼女の何気ない言葉に僕は絶句した。

マジで言っているのか、コイツは……。

——いや、今更驚く事でもない、か。アスカは純粹にそう思っ
て発した言葉なんだろう。

僕は正面に座るアキトにアイコンタクトを送る事にした。あまり
深い意味は無いんだが、この女王様の対応をどうするべきかと歴の
長いアキトに意見を仰ぐ意味で送ったのだ。

すると、アキトは「もう少し様子を見てからでいいんじゃない」と
返して来た。

全く、悠長な事を……。でも、先輩がああ言うなら従うしかない、
か。

「んで、姉貴は時雨さんの事をどうしたいんだ？」

そう話しかけながらアキトは僕からも何かアスカに「言ってやれ」
とアイコンタクトを送って来た。

ふむ、どうしたらいいもんかいのおうと考えながら、アキトに合
わせる感じで良いかと言う考えに至った。

「アスカはさ、転入生の事を殺してみたいって言ったけど。僕達
は別に転入生に恨みなんてない。だけど、アスカが言うように転入
生が何で死にたがっているのかは気になるよ」

僕達の相槌のような言葉の応酬に色々と考えさせられる事がある
のか頷きながらアスカは思案顔になった。

うん、心にもない事を僕は淡々と語ったなあゝとしみじみと思う。
しかし、あの転入生が言った言葉が妙に気になる。私を殺せる人

を探してここに来た、か……。それって、言いかえれば自分の力では死ねないって事だよ。つまり、ある程度の事は自分で試したって事、か……？

ふう。そんな事、ある訳ないか……。

それともう一つ、気になる点がある。

いや、これに限っては僕の勘違いかも知れない。だけど、あの転入生とはどこかで会ったような気がする。

どこだ……？

僕は思い当たる節がないかと記憶を遡ってみた。だけど、それらしき人物は該当しな——いや、該当したにはしたが。しかし、そいつは転入生とは対極の人物だ。

そう、昨日遇ったシスターさんだ。でも、これは僕の勘違いだろう。確かに見た目は似てるっちゃ似てるが、漂わせる雰囲気が違うし、性格も違う。

したがって、この案はボツだ。それに世界で自分と似た人物は二、三人いると言われているから僕は昨日、今日で二人の似た人物と遇ったって事なんだろう。

姉妹って事も考慮してみたが、それも違うと思う。それならもう少し噂になっていてもおかしくないだろう、美少女姉妹が転入して来るってさ。歳もさほど変わらなかったから……。

「キッサーラッくん。何、お前まで難しい顔してんだ？」

顔に出ていたのか突然、アキトに指摘され少しドキッとした。

ふむ、僕はもう少し無表情だったと思うのだが……やはり、水無月姉弟（特にアスカ）と関わってから表情豊かになってしまったのか？

「いや、あの転入生はなぜあんな事を言い出したんだろうなって」

「それはあれじゃね。私とアナタ達では住んでいる世界が違うの？　だから気安く話しかけないでちょうだい♪　って意味を込めての牽制じゃね？」

「口調はともかく、牽制ならもう少しマシな言い方があるだろうに……。例えば、私に気安く話しかけないでちょうだい愚民ども？　って感じで」

「それ、俺より酷い言い方だな。まるで実害をこうむったような言い草だ」

まあ、たった数分で心をずたずたにされた実績があるから……。しかし、アキトが言うように本当に牽制の意味を込めて言った言葉なんだろうか？

もし、そうなら別段気にする事はないんだろうけどな。転入生が一人で居たいって言うなら一人で居ればいい事だし。僕もどっちかって言うとそのちの口だし、彼女の事を否定も肯定もするような立場でもない。冷たい言い方かもしれないが転入生の好きにすればいいと思う。

「なあ、アスカ。そろそろ何か話したらどうなんだ？　とうに浮かんでいるんだろ？」

少し、急かすような言い草でアスカに問いかけた。

実際、ここで僕達がどうこう言おうがアスカの言葉が絶対になってくるから何か浮かんでいながらさっさと発表してほしいと思ったからだ。

つまり、正直な所さっさと結論を出して解放してほしいって所だな。

ようやく、アスカは考えが纏まったのか僕たちの事を見据えた。

「……そうね。少し感情的になってしまったのは謝るわ。あの子なぜ自分の事を殺せる人物を探しているのか、なぜそこまでして死にたいのか……。そこに重きを置いて考えようと思うの。だから、

する事は一つ。あの子の身辺調査をしようと思う」

淡々と語りながらもアスカの表情はどこか楽しげなモノを感じられた。

まあ、アイツにとって久しぶりにもたらされた退屈すぎる日々を少しでも脱却できるかも知れない事件だから無理もない、か。

「で、身辺調査をしてどうすんの？ 転入生の事を説得でもする気か？」

少し嫌みったらしくアスカの真意を問うてみた。

別に深い意味はないけど、どうせ僕たちが調べさせられるんだからそれぐらい聞いても良いだろ？

「特に意味はないわ。ただ、知りたいだけ。いいえ、こんな面白そうな事をみすみす見逃す訳にはいかないでしょ！」

拳を強く握ってアスカは僕の言葉にそう返答した。

とうとう、本音が出やがったか。初めから分かっていただけになんつうか、ここまで自分の気持ちに素直になれるのは逆に清々しいな。

「……分かった。僕達は何も言うまい。いや、言った所で強制イベントは確定しているから無駄な体力は使いたくない。ただ――」

「分かっているわよ。アンタ達が言う『死』を本当に彼女が望んでいるのなら、説得でも何でもすればいいじゃない。私はそれまでの過程を楽しませてもらえば十分だから」

「了解」

「よし。そうと決まれば行動あるのみだな」

何やらやる気がみなぎっているのか、アキトは拳を強く握り締めて熱血漢あふるる言葉を発した。

そんな彼の態度に僕は嘆息を吐きながら冷やかな視線を送っていた。

毎度の事ながら、姉の命令に素直に従ってて面倒臭いと思った事

はないのだろうか？

本人がそれで良いのなら別にいいか。他人の僕がとやかく言う事でもないし、アキト自身がシスコン気味だから姉の役に立てて幸せなんだろうな。

「なあ〜キサラ。身辺調査って一体何をすればいいんだ？」

「そういう事は探偵かストーカーに聞いてくれ」

「なるほど、その道のプロに聞けて訳か……。でも、そんな知り合い居ないからな〜」

僕の言葉を真に受けたのか真剣な面持ちで唸った。

いや、ツツコミ所があるだろうに……。探偵はともかく、ストーカーの知り合いが居る方が稀なケースだろ？

「まあ〜どうにかなるか……」

考えていてもしょうがないと言わんばかりに開き直りやがった。確かにそうなんだが、もう少し頭を使った方がいいと思うぞ〜。特に姉とのあり方についてじっくりとな……。

「その事なんだけど……」

何かいい案があるのか、アスカが渋い表情ながらも言葉を発した。僕には嫌な予感しかしないけどな……。

さて、どんなトンデモ案を告示するのか見ものだな。せめて、僕達が容易に出来るような事でおねげえ〜しやすぜ。

「身辺調査は私とアキがするとして。シゲルには時雨悠と接触し、それとなく聞き出す役目を担ってもらおうと思うの」

「はあ？ 何で、僕が？」

「ほら、アナタは彼女と話した事がある唯一の人物だから」

「少し買い被り過ぎだぞ、その言葉」

僕の事を褒めてそそのかそうとしても無駄だ。生憎だが、僕はそこまでノリが良い人間ではない。

それにしても少し言い過ぎではないだろうか。いくらなんでも僕としか会話を交わして居ない訳がないと思うが。ほら、転入生とお近づきになりたい輩がいるだろうしな。

「いや、姉貴の言葉はマジだぜ。キサラ以外の奴らから話しかけられている所を見ただけで全てスルーだったぜ」

「僕が話しかけた時はたまたま機嫌が良かったただけだと思うよ」
「ったく、大勢で押し掛けるから転入生が機嫌を損ねただけだろ。」

年頃の女の子は繊細なんだよ、馬鹿野郎。

「いいや。俺が見るに時雨さんは常に不機嫌だと思う」

「……失礼な奴だな」

「まあ、そんな所よ。それに彼女の身辺調査をして理由が見つからなかった時のための保険にもなるでしょ？　だから、もしものためだと思ってやれ！」

いつまでもぐずぐずしている僕に痺れを切らした女王様は凄い剣幕で睨みつけて、有無も言わさぬ様相で呈した。

「……了解」

こうして無理やり役割を決められた一人の少年は額を押えて大きく嘆息を吐いたとき、めでたしめでたし……なのか？

第一章く死にたがりの少女と女王様の戯れく 其の三

――翌日。

最悪な目覚めと共に今日一日を迎える事になった。

モーニングコールがアスカからの電話で、僕の安眠が妨げられたのである。

そして、出るや否や命令されたのだ。誰よりも早く学校へ行き、時雨悠と二人きりでコンタクトを取れと……。

はあく。無計画すぎるだろ……。

まず、なぜに朝早くから行かなきゃならない？ もし、早く行つたでしょう。だけど、相手は登校しているか分からないし、遅刻すんでの所で来るかもしれない。そんな賭けのような提案に乗れる訳がなかろう。だから、僕は行かん！

……と、言いたい所だが、行かなきゃ何されるか分からん。それに行つたか行っていないかを確認するために校門に取り付けられた防犯カメラをチェックするから、と言われちゃくもうホント……行かないだろ？

気分が優れないまま、いつもの時間よりかなり早めに起きて登校前に行う身支度をいつも通りに済ませて、家を後にした。

日が出てあまり時間が経っておらず、辺りが少しモヤがかり肌寒かった。

昨日、家を出た遅い時刻と違い、遠方の会社に勤める通勤者達がちらほらと歩いており、僕は朝早くからご苦労様と労いの言葉を心の中で述べた。

しかし、いつも通い慣れた道のりが妙な違和感を感じるのはどうしてだろうか？

見慣れた景色である事には間違いないのだが、辺りに立ち込める

モヤと少し薄暗い環境がそう思わせているのかも知れない。

少々、臭い事を考えながら何ら変わらない学校に辿り着いて、校舎に向かって欠伸をしながら歩いていると、どこかで朝練をしているのか掛け声が聞こえて来た。

青春を謳歌してるのおくと少しジジ臭い事を思いながら校舎に辿り着いた僕は自身の教室へ向かった。

二年C組の表札がぶら下がった教室の扉をゆっくりと開けて入ると、案の定僕が一番乗りだった……。

ほら、言わんこっちゃない。だけど、アスカの言いつけ通りに朝早くに来てやったんだ、これで文句を言われちゃうもう、お手上げだ。

愚痴を心の中で溢しながら、自身の席に着席した。

ふと、入り口近くの壁に掛けられた時計に目をやると時刻は午前七時十分になるうかとしていた。

マジか……。授業開始までまだ、一時間半はあるぞ。どう時間を潰せばいいんだ？

寝る——訳にはいかないよな。寝てる間にもし、アスカが奇をてらって早く学校に来てしまったら何を言われるか分かったもんじやない。

僕が寝落ちするのが先か、はたまた転入生が来るのが先か、あるいは……。

ガラガラ、と僕が馬鹿な考えにふけっていると扉が開く音がした。誰が入って来るのだろうと視線を向けると凛々しい面持ちでまさかのターゲット様がいらっしゃってくださった。

マジかよ、と思いながら見ていると転入生が僕の存在に気付いたのか、僕の事を見るや否や本当に誰からにも分かるような不愉快な表情を浮かべた。そして、大きく嘆息を吐いてからすたすたと自身の座席である僕の前の席にゆっくり腰を掛けた。

ホント、傷つくよな。」

まあいい。奴さんが寝落ちする前に来てくれたからそれで良しとしよう。

しかし、何から切り出せば良いのやら……。

視線を彷徨わせながら逡巡して、ようやく考えが纏まった。

うん、ここは手堅く挨拶だよな。笑顔で「おはよう、転入生」って、感じか。当たり障りなく無難な感じだけど、もう少しフランクな感じの方が良いかな？

「悠ちゃーん、チヨリス！」って、感——いや、ないな。フランクって言うよりチャラ男だ。それに僕のキャラには不釣り合いだ。うん、無難が一番だな……。

挨拶をするだけなのになぜか緊張してしまい、気持ちを落ち着かせるために二、三回小さく深呼吸をした。

「お、おはよう。転入生」

少しおぼつかない口調ながらも僕なりに頑張れたと思う。だけど、転入生は無反応で挨拶を返してくれる事は無かった。

ふむ、想定内の事とは言え少し胸にズキンと来るな……。

「案外、来るのが早いんだな。もしかして、緊張して眠れなかったとか？」

「……」

返事がない。これはただの——じゃない。

「僕もさあ。緊張じゃないけど、なかなか寝付けなくてさあ。気付いたら朝だったんだよ。まいっちゃうよな」

「……」

これしきの事で、へこたれへん！

「どう？ もう学校には慣れた？ いや、まだ始まったばかりだから分からんか」

「……」

「うん、そうだよなあ。人間、慣れるまでが大変なんだよなあ。慣れたら慣れたで、また違った要因で大変だけど」

「……」

「あははは。小童の分際で何語ってんだって話だよなあ」

「……」

「――悠ちゃん。キャワウィーネエ」

「……」

……ダメだ。何言おうがスルー判定を食らわされる。

総スルーされて心が折れた僕は不貞腐れながら机に肘を着いて顔の置き場とした。そして、大きな嘆息を吐いて授業が始まるまでボーっとする事にした。

すると、前方に座る転入生の頭が突然、ガクツと下がった。その光景を後方からボーっと見ていた僕はある疑念がよぎった。

……もしかして、寝てた？

そう思いながらまじまじ見ていると自分が寝落ちした事に気が付いた転入生はパツと頭を上げて周りをキョロキョロと見渡し始めた。そして、何かに気付いたのか見渡すのをやめて、狙い澄ましたようにゆっくりとした動作でこちらを振り向いた。

身体をプルプルと小刻みに震わせながら凄い剣幕で僕の事を睨む転入生に僕は理解出来ずに首を傾げる。

「……えっと、どうかしましたか？」

「……」

僕の事を睨むだけで何も語らない転入生に少し恐怖を覚えた。それと同時に頭の中では良からぬ展開が繰り広げられていた。

ああ、これはアレだな。お約束(?) って奴だよなあ……。ふう

しょうがない。全て受け止めるとしようかね……。

瞳をゆっくりと閉じて深く息を吐いて気持ちを切り替え、覚悟を決めた僕はゆっくりと瞳を開けた。

転入生もこの流れの意図を理解出来ているのか分からないが凄惨な笑みを浮かべていた。そして、僕の右頬に向けて鞭のようにしならせ、スナップを利かせた平手打ちが放たれた。

パチーン、と良い音が教室に響き渡ると同時に意識をもうろうとさせながら椅子ごと床に倒れ伏せている少年がいた。その光景は平手打ちの威力を十二分に物語っていた。

そして、少年は平手打ちを食らい飛ばされている間に気付いた事が二つあった。

まず、転入生がサウスポーだったと言う事。それともう一つ――これは一番重要視しなければならぬ事柄だった。なぜ、殴られなきゃならぬのだと……。

身体をピクピクと痙攣させながら意識が薄れて行く少年を嘲笑うかのように転入生は恍惚な笑みを浮かべていた……。

「おい。キサラくん。生きてるか。おい」

誰かが僕の事を呼んでいるみたいだ。だけど、何だろ右頬が妙に痛い。それに頭がクラクラする……。

少し陰鬱ながらもゆっくりと瞳を開けると中腰姿で僕の事を見つめる男子生徒がいた。

コイツ、誰だっけ……？

佐藤くん？

それとも、鈴木くん？

ああ、高橋くんだっけ？

男子生徒の名前を思い出せないまま、僕は身体を揺らしながらゆっくりと起き上がった。

「大丈夫か？ キサラ」

心配そうに男子生徒は僕(?)に声を掛ける。

しかし、きさらって誰の事だ? 僕の顔を見ながら呼んでいるのだから僕の事なんだろうけど……。一応、返事をしないと。

「ああ、大丈夫だよ。えっと——田中くん?」

首を傾げ確証がないながらも男子生徒の名前を呼ぶと、どうしてか抱きつかれた。

え? どういう事? 僕はこの男子生徒とはどういった間柄なんだ? 男同士が抱き合うなんてよっぽどの事だぞ。

されるがままに男子生徒に身を委ねた僕の瞳から何か零れ落ちて来た。今の自分の感情がどういったモノなのか分からなくなってきた。

悲しいのか?

嬉しいのか?

それとも、何か大切なモノが見つかり感涙しているのか?

ドクン——あれ? 胸が痛む……。何だろうか、この胸の痛みは

……。そして、この新たに感じる未開拓地への道筋。これはもしかしてと言う奴か……?

この道筋を辿ればどこに行き着く?

……分からない。分からないけど、何か大切なモノを多く失いそう。だけど、それでも自分の感情に素直にならなきゃならないよな。

僕は自分の感情に素直になってこの変な流れに身を委ねて、未開拓地への道筋に沿って進む事にした。

「……何、男同士で抱き合ってるのよ。気色が悪い。ペッ!」

不愉快そうな表情を浮かべて、蔑んだ視線で僕達の事を見つめながら吐き捨てるセリフを吐いた、抱き合っている男子生徒と顔がそっくりな女子生徒が僕の視線の先で立っていた。

何だ、この女子生徒。僕達の間柄に嫉妬しているのか？

これだから、現実^{リアル}は……。

僕は愚かな現実に失望して大きく嘆息を吐いた。

「僕と相棒の邪魔すんじゃない。このそっくり女！」

シャッと威嚇をして僕は女子生徒を追い払おうとしたけれど、効果は無く。逆にそれが癪に障ったのかさらに不愉快そうな表情を浮かべて汚いモノを見るような眼差しで凝視された。

すると、女子生徒が何を思っただけか今度は不気味な笑みを浮かべながらスカートのポケットからガサガサと何かを取り出した。

彼女が手に持つそれに目をやると、ドクロのマークが描かれた怪しげな瓶を手中に収めていた。

なっなんだ、あの茶目っ気たっぷりな代物は！

はっ！　もしかして、あれで僕達の絆を確かめようとしているのか？

僕が飲めば僕の勝ち。逆に飲まなければ僕の負け。もちろん、勝者に贈呈されるのはこの男子生徒って事なのだろう。

良いだろう。その勝負受けて立ってやる。どうせ、中身は普通の飲料水だろうからな。

僕は未だに抱きついてる相棒を引き離して、ゆっくりと立ち上がる。そして、怪しげな瓶を手に持つ女子生徒の事を見据えた。

「僕は君のためにこの勝負、勝ってみせるよ」

親指を立てて今の僕が持てる最高の笑顔で相棒に語りかけた。

相棒は僕の言葉に首を傾げて怪訝そうな表情を浮かべていたけれど、僕にはその意図が理解出来ていた。

そう、彼は知らない。僕と女子生徒の間でまさか彼を取り合っただけの勝負を繰り広げられようとしている事を……。

だけど、それがどうしたと言うのだ。僕は相棒のために勝つのみ。
さあ、勝負だ、女子生徒！

僕は女子生徒が持つ怪しげな瓶を奪い取るような形で受け取り、
蓋を開けた。すると、紫色の煙がモクモクと溢れ出て来た。

ふ、ふん。だからどうだと言うのだ。どうせ、グレープジュース
にドライアイスを入れたモノをこの瓶の中に詰め込んでいるにすぎ
ん。

ったく、ひやひやさせやがる。この怪しげなモノを作った生産者
はなかなかの凝り性だとみた。だが、僕には全てお見通しだ！

腰に手を置いて、風呂上がりの牛乳を飲む要領で怪しげな瓶の中
身をグビグビと喉を鳴らしながら一気に飲み干してやった。ゲッフ
と心なしに紫色のゲップが口から出たが気にしない事にした。

僕の飲みっぷりに女子生徒は驚いているのか、口を開けて間抜け
面をさらしていた。

ふん、どうだ女子生徒よ。まさか、僕が飲むとは思わなかっただ
ろ。だが、勝負は勝負。身を引いてもらうぞこの泥棒猫が！

そう勝利を確信した瞬間、僕は床に膝を着いて倒れていた。
ど、どういう事だ？

身体が重い。それに視界が微妙にぼやけて来た。

まさかと思いつながら僕は女子生徒に視線を向けると、ぼやけた視
界の中でもはつきりと分かるぐらいに口元を歪めて凄惨な笑みを浮
かべていた。

そんな女子生徒の姿を目の当たりにして僕はようやく理解出来た。
あの茶目っ気たっぷりな代物は本物だったのだと……。

しかし、時すでに遅しとはこの事なのだろう。徐々にではあった
が意識がもうろうとして来た。そして、最後の力を振り絞って女子
生徒に腕を伸ばしたが、届く事は無くそこで力尽きてしまった。

ああ、勝負には勝ったが結果では負けたって事か……。

虚ろいで行く意識の中で少年は無念さを残して意識を失った……。

そして、しばらくして目覚めた少年は何を思っ
てか奇声を上げなが
ら一直線に窓に走って行き、三階である教室から飛び降りよう
とした所を数人のクラスメイト達が慌てて取り押さえて事無きを得た
とさ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270ba/>

メモダス

2011年12月31日22時57分発行